

## 編集後記

今年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延に伴い、演習のすべてをオンラインのみで実施することとなった。最近はオンライン実験のためのライブラリも充実してきており、実験そのものをオンラインで行うことには不安はなかった。一方で、実験プログラムを作成したことがない学生がオンラインの指導のみでプログラムを作成できるのか、教示をウェブ経由のみで行い、実験参加者の理解が得られるところまで持っていけるのかななどの懸念はあった。教員、学生ともに、もどかしいところも多々あったと思うが、2つのグループが無事に実験プログラムを作り上げ、オンラインで実験を行い、研究の結果をレポートとしてまとめられたことは期待以上の成果であったと言える。関係各位に深くお礼申し上げます。

オンラインで実験や調査を行う際には、対面で行う場合とはさまざまな点で違いがある。実験課題やアンケートフォームといった技術的な問題についてはここ数年のうちに大きな進展がみられ、すべてとは言わないまでもかなり広範なテーマの研究をオンラインで実施可能になった。オンラインで得られたデータが実験室で得られたデータと同様の傾向を示すのかという疑問に答える研究も積み重ねられている。つまり、研究実施とデータ収集そのものは十分に可能になってきている。しかし、それらの実務的な面についてはなおさまざまな工夫と研鑽が求められる。たとえば、今回、まずどうしたものかと戸惑ったのは、実験参加の同意書をどのように求めるかということであった。教示については、スライド資料を用意することにしたものの、対面で行う場合とは異なり、実験参加者が実験者に気軽に不明点を尋ねることはできない。また、実験参加者が課題を行う様子を見て、誤解を正したりすることもできない。もちろん、そうした誤解が生じないように説明を作成すべきではあるが、そうして綿密に作成した資料がどの程度理解に反映されたかはわからない（それを逐一確かめようとする確認テストの山が積みあがる）。

どうもこれまでの心理学の実験には、隠れたカリキュラムならぬ、隠れたバリデーションといったものがあつたのではないかという気がしてくる。同じ手続きを用いたはずなのに生まれるラボによる結果の違いといったものは、そうしたところに由来する可能性もあるのではないか。それをオンラインの実験や調査に取り入れるにはどのような目配りが必要になるだろうか。

2021年3月1日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関 龍太

r\_iseki@mail.tais.ac.jp